

優秀賞

優秀賞

大分県国東市・薬剤師

父の反乱

古城美和

四十歳（一般の部）

「お父さんは、自分のことしか考えてないんだから。今まで元気に勤めてこられたのも私たち家族のおかげでしょうに。」

「そんなことはわかっているよ。だからいまままで家計も母さんに任せてきたし感謝をしている。」

「いいえ、わたしの苦労なんてわかっていないでしょう。だからこんなこと平気でいえるのよ。」

わたしが実家につくと、もう言い争いはエスカレートした状況だった。こんなとき私たち娘は、しばらくの間じつと状況を把握するまで口もださず見守ることにしている。しかし今日は、いつもと空気が違う。先に帰っていた妹がすぎるような目で私に助けを求めている。

ある日の夕方、実家の母から緊急の呼び出しがかかった。とにかくどちらが真つ当な意見を言っているか聞いてほしいとのことだった。わたしは、よく状況は飲み込めないが、母の怒りは頂点に達している様子だった。妹と連絡を取り合い、とりあえず実家に行くことにした。私たち家族は、父、母、娘二人の四大家族。父は長年の会社勤めの後、二人の郷里にもどり再就職をはたし傍目にみても、悠々自適の老後を送っているようであった。両親ともに高校時代からの同級生とあって、夫婦げんかもお互いの意見をぶつけあうような日常の一部で、ある意味ほほえましい気持ちで私たち姉妹はみていた。

そんな母が今日の様子では明らかにちがっていた。母は緻密でまじめな性格のうえ、先のことまで見越して動く様な女性。父はいつもひょうきんだが家族思いで仕事熱心、子育てのことは母に任せてきたことで家庭はまとまっている。そんなどこにでもあるようなありふれた家族であった。私たち姉妹は、すでに結婚もしており、いわゆるスーパのさめない距離に居をかまえている。お互い家庭はかまえていても、何かと両親を頼りにしているところがあつた。そんな母からのめつたに無い緊急の呼び出しに、私たち姉妹は少なからず驚きをかくせずにいた。とりあえず私は、まずことの発端から聞くこ

とにした。

「どうしたん、なんかすごいことになってない？」

と父譲りのひょうきんな口調で問いかけた。母は、待つてましたとばかりにまくしたてるようにいい始めた。

「お父さんが 今後再就職した後の給料は、家計に入れないと言いだしたんですよ。自分は好きなことばかりして！」

父は、これは分が悪いとばかりに、私たち娘にこう切り出した。

「お母さん、話をはしよりすぎだよ。年金はすべて家計に入れるし、母さんにも感謝している。こうして、娘二人が結婚して近所に住みいつもにぎやかで楽しく過ごせるのも、母さんが、立派な子育てをしてくれたからだと思っている。もちろん母さんの趣味の絵手紙もずっと続けていけばいい。でもこれからは 自分のために働き 自分のための小遣いがほしいんだ。」

こういつきに言い尽くすと、あとはだまりこんだ。父はいつもたいていのはことは母に譲ってきたが、一度言い出すと梃でも動かさない九州男子の一面も持ち合わせている。家族全員何と喋っていい言葉がさかしていた。しばらくの沈黙が長いものに思われた。私は、今まで育ってきたたくさんの思い出を、一人思い返していた。

父は本当にいままで、家族のためにがんばってくれた。三十年を超えるサラリーマン生活にも、愚痴ひとつこぼすことなくいつも私たち家族の幸せを最優先させてきた。そんな父の唯一の趣味、いやライフワークといっても過言でないもの、それがパチンコだった。母の、お父さんの好きなことばったりしてというのは暗にパチンコのことを言っているようだ、わたしは直感した。父とパチンコの付き合いは長い。三十年、いやそれ以上かもしれない。

私たち娘二人が幼いころ 休みの日に友達と遊んでいると 父がどこからともなく現れ、

「みんな元気に遊んでいるか？仲良く遊べよ。」

というと必ずおやつをくれるのであった。みんなで食べたチョコレートのおいしかったこと。友達は口々にあんなお父さんがいてうらやましいなといっていた。わたしはいつも誇らしい気持ちで、みんなにそのおやつを配っていた。今思うと、あれは景品だったのだろう。そんなとき私たちは みんなの中でヒーローだった。いつも普段では買ってもらえないような、めずらしいお菓子とともに父はやってきた。高校生になっても、父と私は気の合う友達同士ののような感じで、父親がうとましいと感じられる年頃を経験する

ことも無く、周りから不思議がられることも多かった。父は通勤時間が、わたしの通学時間と重なるようなときは、そつとお小遣いをくれていた。それは、三百円だったり五百円だったりしたが、当時お小遣いをもらっていないかった私には、友達と自由な時間を過ごすための貴重な資金源だった。父は決して多くは無い自分の小遣いの中から、私が、友達との付き合いができるようだまって分けてくれていたのだろうか。今家庭を持って、つくづく父から大切に見守ってもらっていたのだと痛感する。とくに、受験前の父のアドバイスは圧巻だった。わたしが夜中まで机に向かっている

「いいか全力ですべてのことに取り組むな。張り切ったゴムは切れるだけだ。八割ぐらいでいいから頑張れ。遊ぶ気力だけはどんな時でも失うなよ。」

というものだった。普通の親なら絶対に言わないようなことを、平気な顔をして言い放つと、いつものチョコレートを机の上において出ていくのだった。こんな具合で育ったせいか、第一志望のがしたものわたくしは無事に大学を卒業して、現在も薬剤師として働き続けることができています。きつとあの時、大好きな父親から全力で頑張り続けることだけを教えられていたら家庭と仕事の両立に悩み、今の仕事はできていないかもしれない。わたしが仕事や家庭に行き詰った様子を見ては、子ども達を見ているから気分転換に行くよう時間を作ってくれた父。そんな父は、私の主人とも仲が良く、休日には二人で自由時間と称して、パチンコに開店前から並んだりしている。私も、仕事柄、業務中の緊張感ははかりしれないものがあるが、いつも遊ぶ余裕だけは忘れないようにしている。今なら私も父の気持ち判るような気がする。仕事からも家庭からも切り離された自分だけのご褒美の時間、それが父にとってのパチンコの時間だったのかもしれない。

私は、静かに口を開いた。

「お母さん、今回はお父さんに譲ろうか？お母さんも本当はわかっているじゃない？」

「というと、私は今までの思い出を母に語った。それを母はだまって聞き続けた。しばらくの沈黙のあと、

「わかった。お父さん、今まで本当にありがとう。」

とだけ言った。わたしは父に、あとのことは私たち娘に任せてとだけ伝えて、その日は母とゆつくり今までのことを懐かしく語り合った。私たち家族が、いままで父の愚痴ひとつ聞くことなく、父が仕事に取り組んでこられたのは、息抜きのパチンコがあったからかもしれないと母も認め、ようやく我

優秀賞

が家の長い一日が終わった。

あれから一年、父は相変わらず自分のライフスタイルを変えることなく、休日には、私の主人と仲良く自由時間という名の外出をしている。勿論 母とも旅行に行ったりしながら仲の良い生活を送っている。

「お母さん、おじいちゃんからチョコレートもらったよ。みんなで食べたらいいしかったよ。」

我が家でも元気な子供の声が響いている。